



— 高齢競技馬の飼養管理 —

今年8月に行われた第64回デヴィスカップ（ロッキー山脈を含む100マイルを1日で走破するエンデュランス競技）において、優勝馬と同等あるいはそれ以上の評価を受ける Haggin Cup（最も良好なコンディションで完走した馬に与えられる）は、9位で完走を果たした17歳の Monk (USA) というせん馬に与えられました。また、少し前になりますが、2012年のロンドンオリンピックは20歳の Lenamore (NZL) (図1) や18歳の Salinero (NED) など高齢馬の活躍が目立った大会でもありました。個体差もありますが、入念な管理によって高齢とされる馬でもまだまだ一流の競技馬として活躍できることが証明されています。そこで本稿では、高齢競技馬の飼養管理について話題提供します。

・加齢により低下する生理機能

加齢は、呼吸機能や循環機能を低下させ、それに伴って最大心拍数や心拍出量も減少します。このことは有酸素運動能力、すなわちスタミナの低下を意味します。そのほか、体温調節機能も低下するとされ、運動後の馬体中心温度の上昇速度は高齢馬ほど速くなることに関連していると考えられます。これらから、高齢馬の運動後は回復のための時間を十分とるとともに、高温多湿環境下での長時間運動には注意が必要と言えます。さらに、免疫機能の低下も認められ、定期的なワクチン接種は種々の感染症から防御する上で重要と考えられています。あわせて、新しくやってきた馬との接触やそれらの馬との馬具やブランケット、飼料桶、水桶などの共同使用を避けるといった配慮が必要です。また、推奨されるスケジュールに沿った駆虫も健康を維持する上で重要です。

歯の状態は飼料に含まれる栄養素の利用に直接関与するので、日常の飼料摂取状況（口からのこぼれ、摂取速度、糞中の未消化物など）を観察するとともに、定期的なチェックと適切な処置が必要です。

・PPID と IR

高齢馬に特有の内分泌異常疾患である PPID（クッシング病とも呼ばれる）は、IR（インスリン抵抗症、インスリン調節不全）を併発することが



図1 2012年ロンドンオリンピックの総合馬術競技に出場した Lenamore (NZL) は当時20歳だった (The Horse Magazine より)

あります (本誌 vol.15、2017年10月号参照)。すべての PPID 発症馬が IR を併発するわけではありませんが、どのような馬が IR を併発するかについての詳細は解明されていません。IR を併発すると蹄葉炎発症リスクが高まることから、PPID が疑われた段階で飼料給与を含めた適切な処置と精密な検査が推奨されています。その場合の給与飼料は、「低デンプン」が原則であり穀類の給与量は極力控えることです。理想は粗飼料100%とし、不足するエネルギーは消化性の高いビートパルプや良質乾草で補給します。それでもボディコンディションスコアの低下や体重減少が確認される場合は、植物油を添加してエネルギー増加を図ります。一方、乾草にもデンプン同様の構造を持つ炭水化物（非構造性炭水化物：NSC、本誌 vol.22、2018年5月号参照）が含まれることから、給与する前に乾草を30分から1時間水漬してそれらを洗い流してから給与することが推奨されます。

・高齢競技馬に適した飼料

高齢競技馬には以下に示すような、上述のさまざまな機能の変化に対応したあるいはそれに備えた飼料給与が望まれます。

- 呼吸器の健康を維持するために、飼料を湿らせるなどして飼料や牧草に付着している塵埃を除去（吸着）してから与える (図2参照)
- 発汗量が多い馬には、電解質補給量を増加する（とくに食塩給与によるナトリウム摂取量を増やす）
- 運動による負担が大きくなるため、抗酸化物質として機能するビタミン E を補強する
- リンの吸収率が低下することから、アルファルファの多量給与などによる過剰なカルシウム給与を避ける
- 歯に問題がある馬には、葉部割合が高く消化性の高い牧草を給与する



図2 乾草の塵埃を除去するヘイスチーマー。水蒸気により塵埃を吸着させるとともに熱により除菌する (Haygain 社の HP より)